

萩原先生の思い出

山内 恭彦

同じ理学部出身といっても、学年も学科もちがった萩原さんと、どういきっかけて親しく交わって頂けるようになったのか。そのはじまりは定かでない。先生についての最初の思い出は、数物学会でのむずかしい講演であろう。行列を使った天体力学のお話しと、それに例の悪筆がかすかに記憶に残っている。

先生と私とがいつとはなしに話をするようになったのは、どちらの専門でもない数学に凝ったことがもとであるらしい。数学の話は、数学者に話しかけてもまともに相手にして貰えない。それに数学を使うものと、作るものではどうしても話しがしっくり噛み合いにくい。そこへ行くと我々二人は、厳密な、七面倒臭い証明などにはこだわらず、内容を主として議論ができたので、これは面白い、あれは下らないなど、かなり無責任な言辭も弄せたので、自然に気が合ったものと思われる。

私の研究が原子エネルギーから原子衝突、輻射との相互作用などの問題に転じた時分、先生はちょうど惑星状星雲の問題に取り組んでおられた。そこでは共通の問題が少なくなかったので、お話する機会も増した。理研の高嶺俊夫先生がこれに興味を持たれ、藤岡由夫、富山小太郎の諸君の肝入りもあって、時々高嶺研究室に集ってセミナーのようなものを催した。天文からは、先生のほか藤田良雄、畑中武夫、物理からは小谷正雄、須賀太郎などの諸君が参加した。丁度戦前の、もう既に物資欠乏の時代であったが、散会後神楽坂で飲み食いした楽しみは忘れられない。勿論この方は悪童だけが集ったので、萩原さんはどの程度出られたか記憶がない。先生はどうも酒席ではあまりはでな方ではなかったようだ。

趣味という点では全くおつき合いがなかった。日本舞踊をたしなまれたようであるが、拝見の機を得なかったのは残念である。ラジオで対談させられたときにも、学問以外のことでは、ちょっと話題に窮し、海外生活の思い出などでお茶を濁したこともあった。

考えてみると、先生のような稀に見る勉強家と、私のような極端ななまけ者とが気が合ったのは誠に不思議というほかはない。先生の篤学振りには、専門の方の記述があるから深くは触れないが、正に超人的である。ただ先生の業績の全部を知る人は意外に少ないのではなからうか。前記の会のあぶれで、天体力学の本の執筆をすすめたのも、富山君と私の二人であった。戦時にかかって、この本は二冊出ただけで後が続かなかったが、これがもとになって五冊の英文の大著となった。これは Poincaré に継ぐ名著であろう。日本文の二冊は寄贈を受けて拝見したが、勿論全部はわからない。その中の一般相対論の Schwarzschild の解による惑星軌道の分類は、丁度

Newton 力学の楕円、拋物線、双曲線軌道に相当するもので私には面白かった、どうやらわかったのでその話をしたら、今迄誰もこれに言及した人がなかったと喜んで頂けた。

萩原さんは風采には一向かまわぬ人であった。そして色褪せた大風呂敷をはなさず持っておられた。そして、その中から、部厚い洋書、reprint、原稿など取出しては見せられた。それにしてもまだ何かはいいいそうなので、聞いて見たらさるまたがしまつてあるとのことであった。その後しばらくたってから、あのさるまたはどうなりましたかと伺ったら、まだしまつてあるよとのお答えであった。(これはどこまで冗談なのか、あけて見たのではないからわからない。)

先生は若い時分に苦勞されたことがあったようで、他人の心中を思いやることも深く、言行には表面の豪快さに似ず慎重であった。私などがつい思い切ったことを放言すると、ひそかに注意されたこともよくあった。後輩をよく愛されたことも心当りの人が多かるうが、表現、言葉使いがあまり御上手でないで、こわい先生と思っていた人も少なくないかもしれない。それに自己に対してはまことに厳しかったように察せられる。

こんな話も聞いた。

先生が始めて留学されたとき、当時は勿論船で一ト月以上かかって渡英されたのであるが、同行の後年北大、S大教授(工)のA氏が、どこかの港でストリップへさそった。大いに喜んで貰えるつもりだったのに、Sは俺の童貞を破ったと大変に恨まれたということである。さすが後年は宴席で芸妓相手に談笑されるようになったが、学問に対しては、一生涯を通して、一片の妥協も許さなかった。他人にはやさしい、寧ろ控え目の先生も、事学問に関する限り、その評価は誠に辛辣だった、私は専門違いで助かったというものである。

昨年は近親に続いて不幸があったり、階段から転落して尻を強く打ち、三月程は自由に歩けなかったりして、学士院の例会にも引続き欠席していたところ、先生からお見舞状を頂き、君は僕より若いのだから身体を大事にしろと懇ろにさとされた。その先生が、思いもよらず急逝されて、私はほんとうに愕然とした。人好きの悪い私に、親しくつき合ってた下さった正田建次郎、萩原雄祐の二人の友人を、どちらも思い掛けず突然失って、誠に惘然たるものがあり、淋しさに堪えない。

先生の学問的業績を伝えるには、ほかに適任者がある。私事に依った思い出ばかりで恐縮であるが、先生の人間としての一面を伝えることにより、その御冥福を祈らせて頂くのが私にできるせいぜいのところである。